

タイ国、世界遺産「古都アユタヤ」の総合的保存活用施策

西浦 忠輝*

Comprehensive Policy for the Conservation and Utilization of a World Heritage Site, Historic city of Ayutthaya, Thailand

Tadateru NISHIURA*

1 はじめに

ユネスコ主催の国際シンポジウム「Conservation of Brick Monuments at World Heritage Site」[UNESCO 2016]

が、2016年10月にタイ国アユタヤ市において開催された。きっかけとなったのは、2011年の大洪水によるアユタヤ遺跡の被害である。したがって、シンポジウムの主題はアユタヤ遺跡の保存に関するもの



Fig. 1 アユタヤの地理位置 (出典: Lonely Planet)



Fig. 2 「古都アユタヤ」プラモンコル寺院



Fig. 3 「古都アユタヤ」王宮寺院



Fig. 4 「古都アユタヤ」チャイワタナラーム寺院

* 関西大学国際文化財・文化研究センター (Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture, Kansai University, Japan)

であった。

筆者は、2014年5月にユネスコの依頼により、イコモス推薦の専門家として、2011年大洪水後のアユタヤ遺跡の調査を行いレポートを提出した[西浦2015a; 2015b; 2015c]。筆者は本シンポジウムで招待講演を行い、またパネルディスカッションのパネリストを務めた。ここでは、本シンポジウムで議論された世界遺産アユタヤ遺跡の保存と活用についての論点と筆者の視点、考察について述べる。

2 アユタヤ遺跡の歴史、現状、課題

アユタヤ遺跡は、チャオプラヤー川などに囲まれた中州にある。周りに防御のために掘られた運河があり、王宮跡や多くの寺院跡が遺されている。

この遺跡はアユタヤ王朝（1351年～1767年）の栄華を伝えるもので、最盛期には現在のラオス、カンボジア、ミャンマーの一部を領有するほどの勢力を持っていた。中心都市であるアユタヤ地域は、流れの穏やかなチャオプラヤー川を利用した貿易には最高の地形であった。独占貿易で莫大な利益を収め、上座部仏教を信仰していた王は、その利益を基に多くの寺院を建立した。しかし、1767年にビルマ（ミャンマー）の攻撃によりアユタヤ王朝は消滅した。建造物や石像は徹底的に破壊され、壮大な木造建築であった王宮はその痕跡を遺すのみとなり、レンガ造基礎構造木造建造物であったほとんどの寺院は、レンガを中心に、漆喰、石造物からなる遺構となった。歴史的にはそれほど古いものではないにもかかわらず、廃墟となってしまったのはこのためである。

王朝崩壊後、アユタヤ地域は放棄され、トンブリー王朝を経てバンコク王朝となり、現在へと繋がっている。廃墟であったアユタヤ歴史地区には、その後、地

域住民が住み着き、国の近代化とともに発展して市街地化が進んだが、遺構は遺っていた。

1967年に新たな法律により国の重要な遺跡として指定され、1968年から本格的な発掘調査、遺跡整備、保存修復事業が行われた。1976年に中心部だけでなく周辺部の遺跡も含めて国立歴史公園に指定された。

1987年から本格的な保存、修復、整備、活用に向けてのマスタープランの作成が開始され、1991年の世界文化遺産登録を経て、1993年にマスタープランが正式に国会で承認された。マスタープランに則って整備が進められてきたが、ほぼ10年ごとに見直され、更なる、保存、活用に向けての新たなマスタープランが作成されている。

前述のように、アユタヤ歴史地区は徹底的に破壊されて廃墟と化し、遺構だけが遺る遺跡地域なので、建造物遺構の風化は経時的に進んでいる。さらに歴史地区の中心部は川、水路に囲まれており、大雨による洪水の被害をしばしば受けている（Fig. 5）。特に2011年の洪水は大規模なもので、大きな被害を受けた（Fig. 6）。洪水被害は治水と密接に関係する。アユタヤ王朝時代には、自然な水の流れを考えた治水が行われていたが、現在は道路により水路（運河）が寸断されるなど、環境が大きく変わった状況にある。

保存修復については、遺構の現状保存がどこまで可能なのか、修復（復元）はどこまで行うのか、遺跡の活用としての観光開発と保護との関係など、今後、調査、検討すべき課題は多い。

3 主な論点と考察

3.1 遺構は建造物か廃墟モニュメントか

アユタヤ遺跡はレンガ造建造物群遺跡といわれる。実際、多数のレンガ積構造半木造建造物（主に仏教

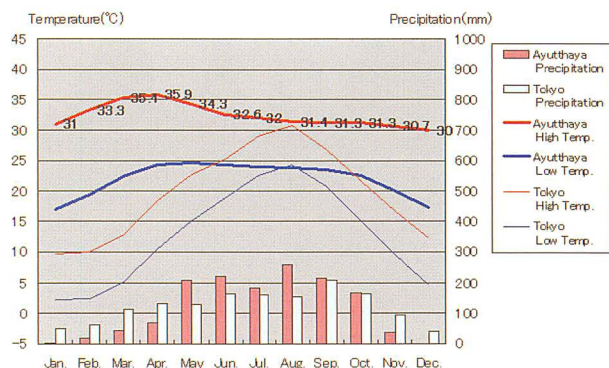


Fig. 5 アユタヤ/東京の気温と雨量



Fig. 6 2011年の大洪水（出典：AFPBB News）



Fig. 7 遺構の現状（プラシリサンペット寺院）

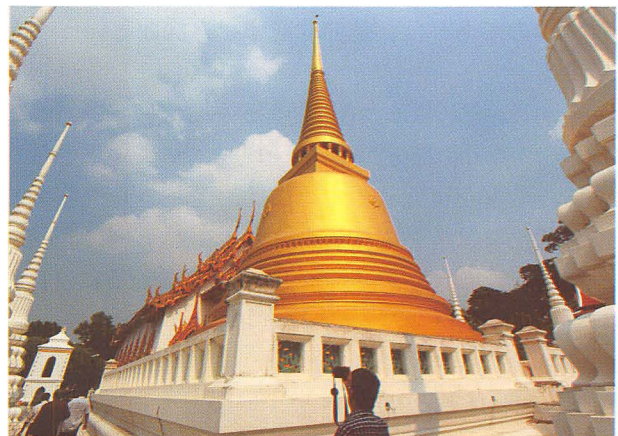


Fig. 8 復元修理された建造物（左：サラプーンウォラ寺院 右：プーカオトン寺院）

寺院)が存在していた(ただし、最大の建造物であった王宮は全体木造であった)。これらの建造物は、徹底的に焼失、破壊されて、遺構と化し、それが現在遺されているのであるが、これらを建造物とみるか、あるいは元建造物の残骸モニュメントとみるかによって、その保存、修復、整備方針、計画は大きく異なる (Fig. 7)。

モニュメントであれば、如何にして現状を維持するかを基本に考える。建造物であれば、建造物であることが理解されるべく、構造体としての保存、修復あるいは復元が必要となってくる (Fig. 8)。木造であった王宮の場合は、復元なしには全く建造物の体をなさない。建造物がモニュメントかの基本認識を明確に共有することが、その保護、活用を考える上で必須であろう。これは文化遺産とは何かという哲学の問題で、認識の一致はきわめて困難である。しかし、それは不都合であっても決して悪いことではない。様々な考え方があるなかで十分な議論が行われることこそ重要であろう。何故ならば、文化遺産の保護、活用そのものが現代の文化であるからである。

3.2 洪水対策

2011年の大洪水によって、アユタヤ歴史地区は水没し大きな被害を受けたが、それ以前にもたびたび洪水は起きていた (Fig. 6)。この地域の多くの民家が高床式になっている事実が、そのことを証明している。チャオプラヤー川の氾濫による洪水は、首都バンコクを含む広い流域で起こる広範囲の災害であり、タイ国政府が大きな国家的課題として対策に取り組んでいることはいうまでもない。ここでは、あくまでアユタヤ歴史地区に限定しての洪水被害対策について議論された。その主な内容は下記の通りである。

1) 城壁の復元

アユタヤ王朝時、洪水被害対策(水の浸入阻止、あるいは進入速度の減衰)としての城壁の役割は大きく、城壁内の中心部は護られたのではないかと推測される。アユタヤが放棄された時点でも城壁はかなり残っていたが、バンコク王朝建立時に、そのレンガをバンコクに運んで再利用したと伝えられている (Fig. 9)。であれば、城壁の復元は歴史的にも十分な正当



Fig. 9 部分的に壊れている城壁

性があるといえよう。この城壁が洪水被害の軽減に役立つのであれば、是非検討すべき課題というべきである。

しかし、それには大きな問題がある。城壁のあった場所のかなりの部分が現在は道路となっているからである。城壁を復元するためには、現在の道路を除去し、新たな道路を造らなければならないことになる。社会的、経済的影響が甚大なこの工事を行うには、よほどの長期的見通しと決断が必要であろう。

2) 治水対策としての水路の整備（復元）

アユタヤ王朝時代は水路（運河）が整備され、船が主要な交通手段であった（Fig. 10）。水路は繋がっており、堰等により適宜、水の流れを調整することによって、洪水の被害を軽減することができたと考えられる。しかし、現在は道路建設等によって水路は寸断されて繋がっておらず、局地的治水対策が取れない状況となっている（Fig. 11）。

そこで、水路の整備（復元）を行って、水の流れを復活させ、局地的治水対策が取れるようにすることが考えられる。この場合、水路寸断の原因となっている道路の改修が必要である。すなわち、水路復元に

伴い、水路との交差部分を橋梁とする必要がある。また、水路も治水対策に耐えうるだけの深さと護岸の強度が要求されるので、大規模な土木、建設工事が必要となる。

3) 総合交通システムの変更

前述の問題を一気に解決する方法として、総合交通システムの変更が、少なくとも理論上は考えられる。アユタヤ歴史地区の交通を水路に委ねるのである。歴史地区内の道路は車両禁止とし、徒歩以外の移動、ならびに輸送は水上交通とするのである。実際、「水の都」と称される世界遺産・ヴェネツィアの旧市街はそうである（Fig. 12）。同じく水の都で、東洋のヴェネツィアと呼ばれることもあるアユタヤ歴史地区としては、検討に値するアイデアといえる。

この場合も、街並み、生活をアユタヤ王朝時代に戻すのではなく、あくまで、総合交通システムを変えるだけで、住民や観光客の現代的な生活を犠牲にするものではない。とはいえ、きわめて画期的な試みであり、壮大なマスタープランのもとに行われるべき大政策であることは間違いない。



Fig. 10 現在も交通に使われている運河



Fig. 11 道路によって寸断された運河



Fig. 12 水の都・世界遺産ヴェネツィア（イタリア）¹⁾

4) 人工的水遮断壁の設置

具体的、即効的な洪水対策としての人工的水遮断壁設置は、数年前にチャイワッタナラム寺院で行われた (Fig. 13)。現在、有効に機能しており、評価されている。しかし、これはあくまでも抜本的な対策が行われるまでの一時的な臨時的応急対策であって、景観の問題も含め、本質的なものではないとの見解で一致している。この手法が、遺跡全体で今後広く応用される方向にはない。

3.3 遺跡保護と地域住民の生活

アユタヤ歴史地区は、遺跡部分を除けば、通常の街として機能している。住民の移住促進による遺跡地域の整備は、1960年代以降現在に至るまで続けられているが、スコータイ遺跡のような遺跡公園化は現実的ではない。とはいえ、今後、水路の復元整備等を行う場合は勿論のこと、遺跡保護をより円滑、有効に進めるためには、住民の移住をより促進していくことは必要である。この場合、地域住民の不利益ならず、将来が見える形での明確なマスタープランの策

定が求められることは言うまでもない。世界に波及しうる良い例を、是非、アユタヤで示してもらいたい。そのためにも、文化遺産関係だけでなく、広い分野の専門家の参画が大いに期待される。

3.4 観光地としてのアユタヤ歴史地区

アユタヤ歴史地区は重要な観光地である。文化的価値だけでなく、経済的価値も大きく、観光開発は国、地域の重要な施策である。しかし、観光集客を意図した安易なテーマパーク的遺跡公園化だけは、何としても避けてもらいたい。遺跡の本当の価値を強く訴える上で、歴史、文化の専門家の役割はきわめて大きく、その意味でも、国際的な情報の公開と連携は重要である。

4 今後の展望

2011年の大洪水被害をきっかけに促進された、アユタヤ遺跡保護国際協力推進の一環として開催された、今回の国際シンポジウムにおいて、具体的な技術



Fig. 13 人工的水遮断壁の設置（チャイワッタナラム寺院）

1) 出典：左：<https://tabinaka.co.jp/magazine/articles/429> 右：<https://wondertrip.jp/europe/uk/53540.html>

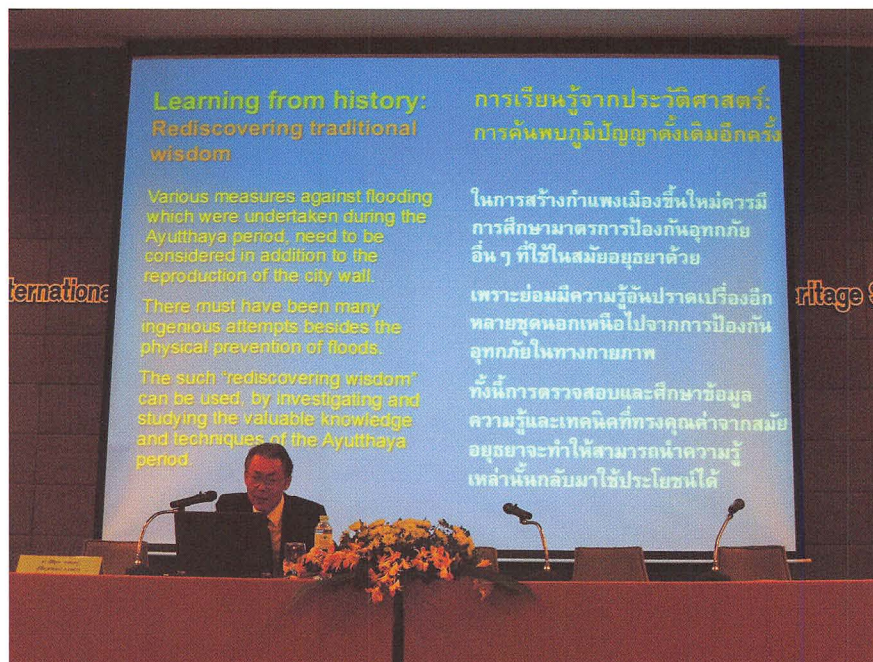


Fig. 14 シンポジウムにおける筆者

論よりも、より本質的、包括的な議論が行われたことは、ある意味必然であったといえよう。基本的な問題点について、広く関係者が認識を共有することが、まず第1に大切なことであるからである。本シンポジウムを、新たなスタートとして、種々の活動を通じて、アユタヤ遺跡のより良い保護と活用に向けて広い専門家の結集が大いに期待される (Fig. 14)。

参考文献

- 西浦忠輝 2015a 「大洪水後のアユタヤ遺跡の保存と今後の対策」、『日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集』、pp. 52-53。
- 西浦忠輝 2015b 「大洪水後のアユタヤ遺跡の保存」、『The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture』、関西大学国際文化財・文化研究センター、pp. 81-87。
- 西浦忠輝 2015c 「大洪水後のアユタヤ遺跡の保について」、『文化遺産学研究』No. 8、国士舘大学、pp. 81-85。

参考ウェブサイト

- UNESCO 2016. "The symposium was initiated in response to the decision of the World Heritage Committee on the state of conservation of the Historic City of Ayutthaya World Heritage Site". <http://whc.unesco.org/en/events/1333>